

- ① **《特集》 難民の未来をつくる日本へ** —わたしの問題としてどう取り組むか
- ⑪ **《うおろ君の気にな～るゼミナール》**
「ミソジニー」って？
- ⑫ **《実録・市民活動「私のいちばん長い日」》**
青少年活動の体制変更を願い合意に
奔走したあの日
水野 篤夫（ユースワーカー協議会 代表）
- ⑬ **《平成30年7月豪雨災害 宇和島発～現地から伝える「被災地の今」》**
情報共有会議から生まれた宇和島NPO
センターが取り組む「心の復興」
谷本 友子（特定非営利活動法人宇和島NPOセンター 代表理事）
- ⑭ **《V時評》**
1.AIと民主主義
2.障害者差別撤廃へさらなる取り組みを
—差別解消法制定10年に当たって
- ⑮ **《毎日NPO！ 山田発信 組織と事業の支援論》** **新コーナー**
お堅いガバナンスをやわらかくお伝えします
山田 泰久（公益財団法人日本非営利組織評価センター 業務執行理事）
- ⑯ **《現場は語る～コーディネート現場から》**
外国人防災リーダーズの発掘・育成と
コーディネーション—情報弱者から橋渡し役へ
上原 ジャンカルロ（公益財団法人三重県国際交流財団 主査／
一般社団法人甲賀市国際交流協会 理事）
- ⑰ **《ヴォロ's トピック》**
NPO支援組織の老舗 アリスセンター解散
- ⑱ **《U35のSocial Good》**
押入れ農園ほか
- ⑲ **《この人に》**
細川 紹々さん（漫画家、イラストレーター）
- ⑳ **《アゴラ／シネマ／ライブラリー》**
NEFNE（ネフネ）／『丘の上の本屋さん』／
書籍紹介
- ㉑ **《晴れ時々ボランティア》**
小林 順子さん（みんなの居場所古民家玉手箱）



じぶんの町を良くするしくみ **赤い羽根共同募金**

共同募金は、地域をつくる市民を応援していきます。

例えば……



地域で、子育てのお手伝いをしたり、
悩んでいるお母さん、お父さんの
相談にのる活動や、



障がいのある人が、まちで幸せに暮らせ
るお手伝いをする活動や、



地域で、1人暮らしや寝たきりの高齢者
に、栄養の整った食事を届ける活動や、



地域に住むみんなが「安心・安全」に
暮らすための活動や、

地域のいろいろな活動のために役立てられます。

- 今年度は前年度に引き続き、中央共同募金会の全国共通助成テーマである「つながりを
たやさない社会づくり～あなたは一人じゃない～」に重点を置き、つながることをあきらめ
ず、感染症防止策を講じながら工夫して行っている活動や、悩み葛藤しながら活動し
ている仲間たちの交流を図るなど、withコロナ、ポストコロナに向けた社会づくりへの支
援など先進的な事業を「重点助成テーマ」として福祉活動の支援を行ってまいります。
- 国内で大きな災害が発生した時は、共同募金は都道府県域を超えて、被災地で被災した人
たちを助ける活動の支援も行います。
- 寄付金には、税の特典があります。会社など法人の寄付金は、全額損金算入できます。個
人の寄付金は、所得税の所得控除または税額控除、住民税の税額控除の対象になります。



赤い羽根おおさか

www.akaihane-osaka.or.jp/
募金の使いみちはすべて、ホームページに掲載されています。

難民の未来をつくる日本へ

——わたしの問題としてどう取り組むか



3・4 ページ：
裁判で勝訴し難民認定され
たウガンダ女性のお祝い会
(2023 年 5 月)

提供＝RAFIQ 難民との
共生ネットワーク

守られず、暮らせない難民が多くいる日本。
難民と共にある社会のために、すべての人が、また
日本の主権者ができることは何か。

現状と市民の取り組みを知り、解決のためのそれ
ぞれの入り口を考えてほしい。

【特集チーム】

早瀬昇、村岡正司、シュナイデル恵里花、
筒井のり子、永井美佳、増田宏幸、百瀬真友美

【協力】

石川えり、玉置太郎

■ 難民の定義

人種、宗教、国籍、政治的意見または特定の社会集団に属するという理由で、自国にいと迫害を受けるおそれがあるために他国に逃れ、国際的保護を必要とする人々。1951 年に国連で採択された難民条約 (Convention Relating to the Status of Refugees：難民の地位に関する条約) で定義されている。

■ 政府機関

日本で難民認定を扱う主要政府機関は出入国在留管理庁（以下、入管庁。2019 年 4 月 1 日に入国管理局から改組）で、難民認定のほか出入国管理、在留資格に関する行政事務を管轄している。法務省の外局。

「難民問題」、誰の問題？

朝日新聞記者 玉置 太郎
たまき たろう

難民問題。あるいは入管問題。近ごろよく聞く「問題」だ。

しかし、遠く感じる。自分たちの暮らしとは関係ないことのように。ニュースを見て、一時的に「かわいそう」「ひどい」と思ったとしても、日々のせわしさにまぎれて忘れていく。

だけど、やっぱり気にはなる。だったら、まずは当事者と知り合いになろう。そう思って、昨年春から1年間、難民申請者らが店員を務める「カフェ」に通った。

「難民」である前に

カフェといっても、在留資格がない彼らは、働くことを禁じられている。飲み物、食べ物無料。カトリック大阪大司教区の社会活動センター「シナピス」が地域との交流の場として、大阪市生野区で週1回開いているカフェだ。そこに毎週、お客として通ううち、私は彼らと顔見知りになった。

スリランカ出身のクマリさん(仮名)は、スパイスカレーが得意料理。少し照れ屋で、高校生の一人息子をすごく大切にしている。そして、母子ともに入管施設の収容を一時的に解かれる「仮放免」の状態で暮らす。

イラン出身のアリさん(仮名)は、元トラック運転手で、運転中に食べていたヒマワリの種が好物。昨秋、故郷で暮らす最愛の母が亡くなった。けれど、仮放免のため帰国はできなかった。

軍政下のミャンマーを昨秋に逃れたポーチョーさんとは、パンクとギター好きの趣味が合った。熱心に日本語を勉強しながら、難民申請の結果を待っている。

カフェに通い続けて感じるのは、彼らが「難民」である前に、クマリさん、アリさん、ポーチョーさんだということ。難民や外国人という属性の前景として、一人一人の人物や、表情や、声や、交わした会話が頭に浮かぶ。そうすると「難民問題」や「入管問題」は、彼ら一人一人が抱える問題として、私の心に沈着していく。

「隣人」になること

日々の暮らしで、難民に出会う機会はそうないかもしれない。それでも、想像力の幅を広げることができる。本誌の特集で紹介する、難民を知るための本や映画に触れることも、そのよすがの一つだ。そこから一歩進んで、紹介する支援団体の活動に携わること

も、大きなきっかけになるだろう。

カフェの常連客である80歳のおっちゃんはどう言っていた。

「この人らは働いたらあかん、どっか行ったらあかん、手足を縛られたようなもんや。その人の側に立とうと思ったら、普段の関わりがないと。隣人ちゅうんは、そういうことやろ」

そう、難民申請者は何より、この社会の隣人だ。マジョリテイである私やあなたが形づくっているこの社会で暮らし、学校へ通い、子を育て、幸せを求める隣人。そして、この社会が働くことを禁じ、期限なく拘束し、命の危険が待つ故郷へ帰そうとする隣人なのだ。

それを思うとき、難民問題は、この社会を形づくる私自身、あなた自身の問題になる。

「難民問題」を動かすために

カフェで友達になったミャンマー出身のポーチョーさんが英語で書いた、日本社会へのメッセージがある。31歳の彼は、軍政に抵抗する民主派組織に加わり、国軍との衝突で仲間を失ったという。和訳を頼まれたその文章の一部を引用させてもらう。

僕たちが求めているのは、安心して生きていける見通しだけ。
必要なのは、生きながらえるためのシエルター、自分の人生を立て直せる居場所だけ。

ほしいのは、共感と理解をもって、僕らの状況に思いを致してくれる「誰か」だけだ。

「難民」「難民申請者」と呼ばれる彼ら、あるいは政府が「送還忌避者」と呼ぶ彼らの、一人一人の語りに耳と心を傾けること。そうして、共感と理解をもって「隣人」としての彼らを想像しようとすることからしか、難民問題は動いていかないだろう。

玉置 太郎 1983年、大阪出身。

2006年、朝日新聞で記者を始め、11年から大阪社会部。大阪市中央区にある外国ルーツの子ども支援団体「Minamiこども教室」で9年前からボランティア兼取材を続けている。2017、18年、英国ロンドン大学大学院で移民公共政策学の修士課程修了。その間1年余り、難民の子どもの支援教室でボランティア兼調査をして論文執筆。

RAFIQ 難民との共生ネットワーク

共に暮らす住民として

大阪市淀川区に拠点を置く、NPO法人RAFIQ^{ラフィック} 難民との共生ネットワーク（以下、RAFIQ）。RAFIQとは、ペルシャ語とアラビア語で「友達」という意味をもつ。共に暮らす住民として、RAFIQがどのように難民と関わっているのか、代表の田中恵子さんに話を聞いた。

RAFIQのはじまり

田中さんがRAFIQを結成したきっかけは、ひとりの青年との出会いだ。アフガニスタン映画の上映会で知り合った難民が、西日本入国管理センター（当時）に収容されたと知り、面会に通うようになる。青年もまた、個人で面会活動を行っていた。いつも待ち時間が長く、何度か待合室で顔を合わせるうちに話をするようになり、「何も分からない者同士だけど、友達」としてできることをやっていこう」と意気投合。それぞれの知り合いに声をかけた。すると20人ほどが集まり、できる限りのイベントを企画した。

そのうちのひとつが、ハンガーストライキだ。西日本入国管理センターの近くの公園にテントを張って、誰でも来られるようにし、難民につい

て話すことに重きを置いた。結成して間もない団体にもかかわらず、1週間で200人ほどが参加し、盛況のイベントとなった。

OSAKAなんみんハウスの開設

あれから20年、今は「OSAKAなんみんハウス」（以下、なんみんハウス）を拠点に活動している。「使っていない住宅があるので、RAFIQに提供したい」という市民からの申し出を受け、2016年に開設が実現した。

なんみんハウスの役割は、単に事務所としての用途だけではない。「こは『困窮難民専用シェルター』としても活用していて、RAFIQが支援する難民が暮らしています」

なんみんハウスでは、最長6カ月の入居が可能だ。なぜ、期間を設けているのだろうか。

「半年もあれば、ある程度日本での生活ができるようになります。いつまでもRAFIQが付き添えるわけではないから、本人のネットワークを広げられるように期間を決めて入居してもらい、支援するんです」

RAFIQの生活支援

シェルターには、難民の中でも住居や支援者がいない人が住む。生活が不安定な仮放免者も対象だ。6カ月の期間中、将来的に日本で自立した生活が送れるよう、会員が電車の乗り方を教えたり、買い物に付き添ったりしている。例えば、宗教上の理由で豚肉由来の食べ物を食べられない人にとって、日本語の食品成分表を読むのはとても難しい。そのため、ある程度慣れるまでの付き添いは必要なのだ。

はじめは手厚くサポートするが、すべてをRAFIQ内で完結しないようにしているという。日本語学習がその例だ。RAFIQの会員が日本語を教えるのではなく、行政が運営する日本語教室に通うよう準備する。「知り合いが増えるし、教室では日本の文化も教えてくれるから。なるべく地域と関わって、ネットワークを作ってもらおうようにしています」

日本で生きていくための基盤を着実に整える、RAFIQのサポート体制がうかがえた。



同行支援の様子。電車の乗り方をサポート

NPO 法人RAFIQ 難民との共生ネットワーク

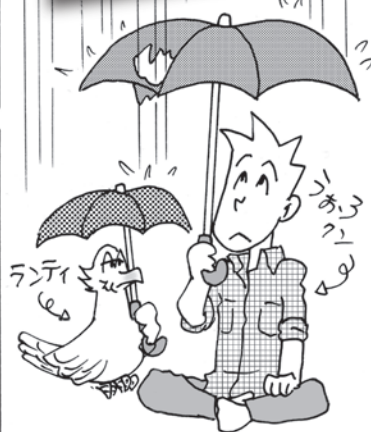
大阪市淀川区東三国4丁目9-13
OSAKA なんみんハウス

RAFIQ会員のネットワーク
とはいえ、6カ月がたてば全てのことをできるようになるわけではない。とりわけ難しいのが、行政や教育機関とのやり取りだ。
例えば、家族で日本に逃れて来た場合。行政とのやり取りを経て学校に入学できても、保護者向けのプリントはすべて日本語で配布される。学校側が対応してくれる場合は良いが、全ての学校が全面的にサポートしてくれるわけではない。その中で、授業に必要な持ち物や提出書類を完壁に用意するのは、とても難しいことだと想像できる。
そうしたケースには、RAFIQの会員がサポートに入ることがあ

Vol. 130

「ミソジニー」って？

うおろ君の
気にな〜る
ゼミナール



まんが ■ ラッキー植松



(注1) イブ・K・セジウィック著、上原早苗訳『男同士の絆―イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会、2001
(注2) キム・ジヘ著、伊怡景訳『差別はたいてい悪意のない人がする』大月書店、2021

ミソジニーとは女性にたいする嫌悪を意味する。女性の身体や母親への恐れからなど精神的な説明がなされるが、社会的な文脈ではさらに、男性同士の閉じた関係性の維持のために女性を排除し「欲望の対象」や従属物として抑圧的に女性を扱う(注1)という男性優位なジェンダー構造への言及が必要である。その逆となる男性嫌悪をミサンドリーと呼ぶが、先に述べた構造を背景に持つミソジニーと、差別の主体への嫌悪という文脈で使用される場合のミサンドリーは意味合いが異なる。キム・ジヘは、そういった嫌悪の対立は「喧嘩両成敗」ではなく、「権力を持った人が使う」嫌悪は権力を強化すると述べる(注2)。ミソジニーは、女性への差別やいやがらせ、性暴力、フェミサイド(成功した女性への嫌悪による殺人)の要因ともなる。

また、女性同士のミソジニーの背景にも、男性とつながることによって利益を得られる男性優位な構造の下で女性同士が敵対するしくみや、生き方が多様化する中、自分に自信を持てず、他の女性と比べることで自分の価値を認識しがちな女性ジェンダーの特徴などがあるとされる。

大阪公立大学現代システム科学
研究科客員研究員 荒木 菜穂

ウォロ・バイダー、
いかがでしょうか？

ウォロ2年分(12冊)を
挟み込めるバイダー
(1冊500円+送料350円)です。
お問い合わせはウォロ編集部/office@osakavol.orgまで





これからの社会を担う35歳以下の社会起業家。素直な思いと自由な発想は、どんな商品・サービスを生んだのか。若き起業家たちの「物語」には、きっとあなたにも伝わる「熱さ」があります。

U35の
Social Good

第38回

押入れ農園 ほか

自給ラボ株式会社 代表取締役 ますだ じゅん 栢田 純さん

大阪府吹田市元町 7-17 Email: contact@company.jikyuu-lab.com
設立: 2019 年 3 月 スタッフ数: 秘密結社の仲間 4、5 人

2019 年設立。LED 照明を使い野菜を栽培する室内用キット「押入れ農園®」を製造・販売。栽培用 LED 照明単体での販売や、住居の 1 室を室内菜園にリフォームする「お部屋菜園」の製造・販売なども行っている。空き地や庭に設置する「自給自足ハウス」、ロボットの遠隔操作で遠方の農作業をするシステムなど、「自給」を支える商品を開発中。

「自宅で自給自足」をテクノロジーで実現 資本主義社会で生きにくい人のために

押し入れサイズの室内農園

大阪・JR 吹田駅近くに、自給ラボの「押し入れ農園」展示場がある。中には一間の押し入れサイズくらいの棚が設置されていて、LED 照明の下で野菜が育っている。

小松菜、ブロッコリー、パセリ、タイム……みずみずしくおいしそうだ。棚の下には水槽があり、金魚とホンモノコが泳いでいる。

案内してくれた栢田純さんは、水槽の水を小さな手桶でくんで、上段の野菜の根元の土にかけた。「魚のフンなどで水に養分が含まれているので、肥料になるんです」

水槽には、エアコンの排水をろ過した水がしたたり落ちるように、パイプが組まれている。

「土と水槽から蒸発した水分が、エアコンを通して水槽に流れ落ち、魚が育つ。その水槽の水で、野菜が育つ。普段ここには人がいないので不純物が少なく、空調管理と LED 照明で魚と野菜が育つ循環ができあがっているんです」と説明してくれた。エアコンは温度管理のため入れっぱなしだが、開口部が少ないので電気代もそれほど高くないそうだ。

家電製品の分解に夢中

もともと、理科や技術が大好きだった。10 歳にならない頃に自宅の壊れた電話を分解してからは、電気製品などを分解して仕組みを知ることが面白くてたまらなくなった。壊れたものは好きにできるので、家の電気製品が壊れるのを心待ちにしていたという。

高校卒業後、大阪大学工学部に進学。出身も関西だが、進学を機に一人暮らしを始めた。ベンチャーサークルに入り、起業家の話を聞き、事業案を発表するうち、発明を社会に生かすには就職よりも起業がいいと考えるようになった。大学院に進み、工学とともに経営を学べる研究室に入った。

うっで大学に行けない時期 LED で野菜栽培

ところが、社会に出る時期が現実逼迫してくると、起業への不安と就職への迷いが出る。それがきっかけでうっになり、大学に行けなくなった。

「このまま働けずお金を稼げなかったら、どうやって生きていくんだろ」。不安な中で、スーパーで買ったサニーレタスの葉を取って食べたあと、ふと「栽培しよう」と思った。芯



①吹田展示場。内部の見学は予約が必要②菜園の棚の下にある水槽③ろ過装置④建設予定の自給自足ハウス。室内菜園のほか太陽光発電、メタン発酵装置、井戸などを備える⑤遠隔操作で農地に見立てた草地を偵察するロボット。屋内のスマホで操作し、スマホにはロボットのカメラが捉えた農地の様子が映る(②④⑤提供=自給ラボ株式会社)

をコップの水に付けてLED照明を照射すると、3週間ぐらいで食べられるサイズに育った。

それまで農業に全く関心がなかったが、目の前で野菜が育つ様子に感動。これがある程度の面積でやれば、野菜を買わずに食べていけると考えて、空いていた押し入れの棚でサニーレタス40株を栽培。再び3週間ぐらいで収穫に成功した。

LED照明などの技術を生かせば、自宅で食べ物の自給自足ができる。これを商品化して、働いてお金を稼ぐことが下手な人や難しい人でも、生きることを家が保障するような世の中できないか——起業の方向が見えてきた。

SNSで拡散、注目を浴びる

授業に行けるようになったが修士論文は書かず、在学中に自給ラボを設立。大学院は2019年3月に単位取得後

中退した。
起業後1
年間は、京
都大学農学
研究科社会
人コースで
農業を学び
ながら仕事

をした。それでも19年秋には、商店街で見つけた空き店舗を借りて、冒頭で紹介した押入れ農園展示場をオープン。農学研究科のコースを終えた20年春、これから本格稼働しようという時期に、LED照明で海ぶどうを育てた話をSNSで書くこと拡散された。話題になって新聞数紙とテレビの取材につながり、マスコミに知られるようになった。テレビ出演はこれまで15回のぼる。

問い合わせが全国から来るようになり、月何件かの注文を受けるように。思いに共感した技術者仲間ができ、1年ほどは1人雇用することができた。展示場を整えてくれるボランティアも現れた。

目指すのは自給自足ハウス

一方で、押入れ農園のニーズに限界を感じるようになった。お金を稼ぐの

が下手な人や、稼げなくなる不安があるような人は、狭い部屋に住んでいて押し入れのスペースにゆとりがない。賃貸の部屋を自由に使えないなどの制限もあり、本当に対象にしたかった人には届きにくい。受注件数も会社を大きくするほどには伸びず、空き部屋がある家庭に向けて1室を菜園専用にするフォームする「お部屋菜園」もメニュー化した。それも本懐ではない。目指したいのは、収入がなくなったときに住む人を助ける「自給自足できる家」だ。

第一号の建築を目指す中、滋賀県彦根市で手の届く価格の土地と巡り合い、20年8月に購入。ドーム型の「自給自足ハウス」を仲間とできるだけ手作りで建設し、野菜に加えてエネルギーも自給自足できるような体験ハウスにする予定だ。

もうひとつの新たな取り組みは「遠隔農業」だ。自宅に菜園を作るスペースがなければ、離れた農地で自給自足すればいい。スマホでロボットを遠隔操作して、ロボットに農地を走らせて見回りをさせれば、発育状況などは自宅で分かり、人間が出むく作業は最小限になる。開発は終わりテストも成功した。刃物を使う安全性をクリアすれ

ば、草刈りも可能になるかもしれない。「資本主義社会は技術を発展させて多くの人の生活を向上させる一方で、お金が無かったら生きていけない社会でもある。それをカバーするために政府があるけど、うまくいっているようには見えません。自分の家で自給自足できれば、最低限生きていける。資本主義社会に『ログアウト』の機能を実装するんです」。今社員は自分一人だが、開発に自発的に参加する仲間がいる。夢中で開発する毎日、枘田さんは楽しくてたまらない。

インタビュー・執筆

編集委員 百瀬真友美

枘田純さん

1993年生まれ。9歳頃から電子回路やプログラミングに触れる。大阪大学工学部卒業後、同工学研究科(大学院)在学中に自給ラボ株式会社を設立し、単位取得後中退。京都大学農学研究科社会人コース修了。電気回路、照明設計などの技術者で、大抵のものは作れる。



「NEFNE(ネフネ)」

京 阪寝屋川市駅から徒歩3分のところにある、雑貨屋
&フリースペースのネフネ。寝屋川市にある精神科・

医療法人三家クリニックから、医療の枠を超え、暮らしの中で包括的なサポートをしていくためのプロジェクトとして5年ほど前に生まれた。精神的な課題などから社会生活に不安や困難を感じる人たちが安心して社会とつながれる場所を目指す。一見普通の雑貨店だが、メンタル面に効くグッズや書籍も充実している。授産品やアート作品などを置けるように、また誰でも気軽に入りやすいようにという思いから、雑貨店という形になったそうだ。

フリースペースでは俳句、手芸、ボードゲームなどさまざまなサークル活動やワークショップ、発達障害の自助会を開催。飲み物が置かれ自由にくつろげるサロンスペースもある。ギャラリーでは個性的な作家の作品が展示される。

筆者が店内にカメラを向けていると、「いいカメラですね」と声をかけられた。店員さんかと思ったが、カメラを片手によく店に寄る常連さんだそう。愛機のカメラのことやネフネとの接点をにこやかに語ってくれた。おかげで取材の緊張もほぐれた。

困難を抱えた人、近所の人、通リすがりに来店した人……。初めて訪れてもスタッフや常連さんが温かく迎えてくれる。

スタッフの野原由美さんは「障害のあるなしにかかわらず、またそういう『肩書き』『役割』に捉われず、本来の自分でいられる場所でありたい。買物目的でなくても、ふらっと立ち寄ってお茶やお話ができる居場所のひとつになれば」と語る。

対話や交流を通じて新しい出会いや気付きが生まれる、「寝屋川の乗合船」(「ネフネ」の由来)だ。

インタビュアー 編集委員 華房ひろ子
執筆 上田七生



金継ぎワークショップ(左、提供=NEFNE)と、癒しグッズを手にしたスタッフの皆さん。右下は手話ができることを伝える「手話ブローチ」



NEFNE(ネフネ)

大阪府寝屋川市八坂町13-11 電話 072-814-6690
営業時間 木・金・土曜11:00~18:00



個性的な雑貨が並ぶ店内。『ウォロ』のバックナンバーも



「黒い雨」訴訟

小山 美砂 著
集英社新書、2022年7月
1056円(税込)

原 爆投下後の広島で放射性物質を含んだ「黒い雨」を浴びたが、国の援護対象区域外とされた「原爆被害者」がいる。そのうち有志の数十名が2015年、広島県・広島市を相手取って提訴した。

原告側は、自分たちを「被爆者」と認め、その証しである被爆者健康手帳の交付と、「黒い雨」が放射能を帯びていたこと、内部被ばくの影響があることなどを認めるよう求めており、実質的には国に援護対象を拡大するよう迫っていた。「黒い雨」による健康被害や、働けず貧困に苦しむ仲間、すでに命を落とした被害者はもちろんのこと、東

京電力福島第1原発事故の被害者をはじめとする「黒い雨」以外の被害者救済も見据えていた。

他方、国は援護対象区域の指定や被爆者認定に高度な「科学的・合理的な根拠」を要求、原告と対立した。他の戦争被害者に対する対策に比べ著しい不均衡を生むことへの「考慮」かもしれないが、著者は「疑わしきは救済」する社会であってほしいと切望する。

一審、二審とも原告全員を「被爆者」と認めた全面勝訴が続き、ついに政府を動かした。2021年7月、菅義偉首相(当時)は首相談話で上告見送りと原告全員への手帳

交付、さらには原告以外の救済も検討したいと表明。他方、内部被ばくの健康への影響を科学的な線量推計によらず広く認めるとした点を受け入れ難いとし、埋めがたい被害者側との考え方の乖離が明らかとなった。ある原告は「国に内部被ばくを認めさせる」という一番の目標がかなわなかったと憤慨する。

黒い雨被爆者が「切り捨てられてきた」戦後と、これに疑義を唱え、訴訟で援護を勝ち得た苦難の歩みを、原爆報道を志して記者として取材を続けた著者が記録した力作。

編集委員 阿部 太極

(注) 本書では、原爆による被害を表す用語として定着しているものは「被爆」、放射線の影響に関する話を展開する時には「被ばく」と表記している。

皆 さんの町には本屋があるだろうか。当たり前前の存在だった本屋は、私の町でも随分減った。店頭で本を手に取り、紙の質感を感じながらページをめくり、面白そうな一冊を見つけて買う楽しみは少なくなった。実際、私自身本を読む時間は少なくなっている。最近手にするのは仕事関係の本ばかり。好きな小説を読むことがめっきり減った。1冊読み切り、登場人物や外国の町の情景で頭がいっぱいになるほどのめり込んだのはもう去年のこと。家には未読の小説が積まれている。そんな私だが、老人と少年、2人の姿が写った映画のビジュアルとタイトルに惹かれた。

イタリアの古く美しい石畳の町。丘の上の古本屋が舞台だ。年老いた本屋のあるじと、アフリカからの移民である少年の交流が描かれる。少年の背景は詳細に語れないが、本を買う金は無い。店先に並べられた漫画を見つめる少年に、老いた店主は「読み終わったら返しにいで」と貸してやる。再びやって来ると、今度は『ピノッキオ』を薦める。『イソップ寓話集』『アンクルトムの小屋』『星の王子さま』『白鯨』などなど。皆が知っている本が次々に登場し、子どもに戻ったようで楽しい。

老人は一冊ごと少年に感想を尋ね、本の楽しみ方、ものの見方は多様だと説いていく。利発な少年が次々と本を読み破り、身体中に広い世界を吸収していく様子がすがすがしい。年齢や国籍を超えた2人は友人のようであり、経験を積んだ祖父が孫に何かを託すようでもある。

古本屋には、本を売って現金にしたい人、発禁本の類いの人を知りたい人、そんなことを感じた。

今月の作品 「丘の上の本屋さん」

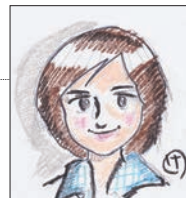


監督・脚本：クラウドディオ・ロッシ・マッシミ
出演：レモ・ジローネ、ディディー・ローレンツ・チュンプ、コッラード・フォルトウーナ
配給：ミモザフィルムズ
2021年 | 84分 | イタリア | イタリア語
上映情報は <https://theaters.jp/12928>

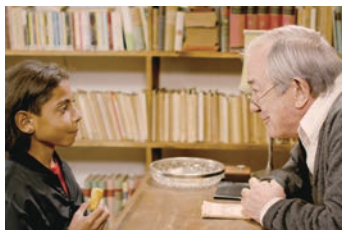
●今月の館主

おおがねく よしみ
大兼久 由美

沖縄県生まれ。柴田昌平監督作品のプロデュース、配給を行う。長編記録映画「ひめゆり」(2007)は公開以来毎年上映を続けている。新作「百姓の百の声」(2022)は自主上映を募集中。お問合せ：042-497-6975



イラスト：杉浦 健



私の市民活動 Library (第56回)



やっかいな問題はみんなで解く

堂目 卓生、山崎 吾郎 編
世界思想社、2022年12月
2200円(税込)

社 会的な課題の解決のために、実践においては連携・協働、研究では学際性や学際共創性の重要性が指摘されている。書名にある「みんなで解く」ということへの模索が続く中、①なぜみんなで解くことが必要なのか、②どんな課題をみんなで解くのか、から考えることの必要性を伝えてくれる一冊である。

そのためのヒントとなるのが「やっかいな問題」というキーワードである。新型コロナウイルス感染症において、「優先すべき政策は経済対策か、感染症予防か？」との議論が盛んにおこなわれたのは「みんなで合意できる解決策」

がみつからなかったことに起因する。本書では「やっかいな問題」を「問題の輪郭がはっきりしておらず、答えがあるのかないのかがよくわからない。(中略)人によって問題の深刻さやその受け取り方が異なっている。場合によってそれらがお互いに矛盾していると感じられることもある」と説明する。つまり、誰かが問題と解き方や答えを提示しない限り解決できない課題とも言える。一方で、誰か1人がそれを定めても「私の正解」にしかならない。だからこそ「みんなで解く」ことが重要になる。

「地域活性化」「空き家対策」

「アートプロジェクト」「多文化共生」などいくつかの課題において「やっかいな問題」に向き合いながら実践をとおり誤解に気づき、妥協や学び直しを繰り返すことで解決に取り組む事例が紹介される。そして「解くとは、なによりまず解くことである」と本書は締められる。

専門性や知識は、一部の限られた人だけが有するものではない。その人にしかない経験や知識をリスペクトして「やっかいな問題」に「みんな」で取り組むことの大切さを再認識させてくれる。

編集委員 竹内 友章